大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十六卷　第三號

昭和三年三月一日發行

論叢

相續稅の逋脫……法學博士　神戸正雄
リカアドの勞賃論……經濟學士　堀經夫
利潤成立の機構……文學博士　高田保馬
定期船事業におけるの運送原費と運賃との關係……經濟學博士　小島昌太郎

說苑

琉球の廢藩後に於ける治制……法學博士　山本美越乃
フィジオクラートの價値論……經濟學士　山本勝市
委任經理に就いて……經濟學士　楠見一正

雜錄

フォード制とテイラー制……經濟學士　星野周一郎
營業稅と營業收益稅……經濟學博士　汐見三郎

（禁轉載）

リカアドの勞賃論

——その基本概念二つ——

堀　經　夫

はしがき

從來リカアドの勞賃論を紹介乃至批評したるものは、之を枚擧するに遑がない程多くある。併し乍ら、私の觀るところに依れば、此等の紹介なり批評なりには、未だ不完全なる點が可なり含まれて居る。而してそは、要するに、リカアド自身の學說を十分精細に探究理解せざることに起因するものゝやうである。これ私が本稿を草して彼れの勞賃論の能ふ限り正確なる展開を試みんとする所以である。但し紙面に限りがあるから、本文では其の根本概念と考へらるゝもの二項のみを取扱ふことゝする。

第一節　勞賃の種類——リカアドは勞働の價格ばかりでなく勞働の價値をも取扱へることの論證を主題とす。

一、リカアドは、『勞賃に就て』と題する『經濟原論』第五章を、『勞働は、賣買さるゝ所の、而して分量に於て增減され得る所の、他の總ての物と同じく、其の自然價格及び其の市場價格を有

つ、』[1]といふ句を以て開いて居る。而して從來彼れの勞賃論を取扱へる多くの學者は、この句よりして、第一に勞働を商品の一種と看做し、第二に商品たる勞働の價格（卽ち勞賃）を自然價格及び市場價格の二つに分類して考察する、といふのがリカアドの勞賃論の出發點である、と說明して居る。無論かゝる觀方が誤つて居るといふわけではない。何故なれば、彼は、この第五章に於て、『勞働者をして、相互に、增加又は減少なしに、生存をし且つ其の種族を永續するを得せしむるに必要なる、その價格』[2]である所の勞働の自然價格（若くは自然勞賃）と、『供給の需要に對する比例の自然的作用によつて、勞働に對して事實上支拂はるゝ價格』[3]である所の勞働の市場價格（若くは市場勞賃）とを、各々獨立せしめて又は相互に關係せしめて、縷々說明して居るのであるから。併し乍ら吾々は、勞働の價格に關するリカアドの學說如何を觀る前に、勞働の價値といふことに就て彼が何等かの說明を加へて居りはしないかといふことを、一應疑つてみる必要がある、蓋し、『經濟原論』第一章に於て商品の價値を詳細に論述せる彼としては、勞働を商品の一種だと看做す限り、其の價値を先づ明かにすべきが、理の當然なるが故である。

尤もリカアドは、貨幣側よりする貨幣價値の變動は無いものとして常に議論を進めて居るのであるから、彼にとつては價値といふも價格といふも結局は同じことであり、從つて價値の大小は價格の大小を以て直ちに比較され得るのである。併し惟ふに、價格を以て價値の大小が比較され

1) 拙譯『リカアド經濟原論』137頁
2) 同上
3) 同上 139頁

得るからといつて、價値そのものゝ本質が價格論によつて闡明さるゝといふわけのものではない。而してその故にこそ、リカアドは『經濟原論』第一章に於て、價値と價格とを可なり混同しつゝも尙ほ主として價値を取扱ひ、その本質を掴むべく努力したのである。そうして私は、勞働といふ商品に就ても亦リカアドが不十分ながらその價値を論じて居る、との意見を持するものである。

二、然らば彼は如何なる形式によつて勞働の價値を說明して居るか。曰く、眞實勞賃(real wages)といふ名稱の下で。而してこの眞實勞賃に相對するものは名目勞賃(nominal wages)である。今彼がこの眞實勞賃及び名目勞賃に對して如何なる內容を與へたるかを觀るべく、一二の引用をなすであらう。

彼は、『外國貿易に就て』の章(『經濟原論』第七章)の中で、利潤と勞賃との根本的關係を簡潔に說明しつゝ、曰く、

『既に屢々述べたる所であるが、尙ほ繰返し注意するの必要あるは、利潤は勞賃によつて、(而かも)名目勞賃によらずして眞實勞賃によつて、(卽ち)年々勞働者に支拂はるゝであらう所の磅(貨幣)の數量によらずして、此等の磅を取得するに必要なる日々の勞働の數量によつて、定まる、といふことである。』[4)]

4) 同上 240-241頁 圍點は譯者の新たに附したるもの。括弧內の句亦同じ。

又『價値に就て』の章の第七節に於て曰ふ、

『勞賃は、勞働者に支拂はるゝ物の眞實價値によつて、卽ちそれを生産するに使用さるゝ勞働及び資本の分量によつて、測定せらるべきものであつて、上衣、帽子、貨幣、又は穀物の形を採れる、勞賃の名目價値によつて（測定）せらるべきではない。』[5]

此等の句より察する時は、リカアドが眞實勞賃若くは勞働の眞實價値と言へるものは、勞働者の取得する貨幣、上衣、帽子、穀物等を指すのではなくて、――此等の物は名目勞賃たるにすぎない、――此等の物を生産するに必要なる勞働の分量（註）を意味するものなることが明白である。

（註）今引用せる第二の句の中には、『勞働及び資本の分量』となつて居るが、これは、言ふまでもなく、勞働價値論修正後に於て、リカアドが『勞働の分量』なる語に代へて用ひた言葉であるから、吾々は彼れ本來の勞働價値論の立場に立ち還つて、この句の中から『資本の分量』なる語を抜き去つても差支はないであらう。

尙ほこのことは、マルサスが勞働の眞實價値なる語を解して、『生活の必要品、便利品、及び奢侈品でもつて測定せられたる勞賃の價値』[6]なりとなせるに對して、リカアドが彼に與へたる手紙の中で、『この言葉（卽ち勞働の眞實勞賃といふ言葉）の用法は間違つて居ると私は思ふ、』[7]と言へるを見ても、最早一點疑ふ餘地はないであらう。然るに、これまで殆んど總ての學者は、リカアドが眞實勞賃及び名目勞賃なる概念にそれぞれ與へたる上述の如き內容を無視若くは看過し、彼

5) 同上 82-83頁　但し多少改譯したる部分あり。
6) Malthus, Principles of political Economy. 1820. p. 241.
7) Letters of Ricardo to Malthus. 1887. p. 123. 括弧內の句は譯者の補ひたるもの。

も亦、通常の用例に倣つて、名目勞賃をば勞働者が受くる貨幣金額即ち貨幣勞賃（money wages）の意に解し、又眞實勞賃をば勞働者がこの貨幣勞賃を以て購ひ得る諸〻の消費貨物の分量の意に解しゐたるもの丶如く、說いてゐるのである。たゞその稀なる例外である所の學者は、私の狹い研究の範圍よりすれば、かのマルサス、ベイリイ、及びマルクス位のものである。

マルサスがこの點に氣づいてゐたことは、彼がその著『經濟學に於ける諸定義』の中に於て、

『リカアド氏によれば、眞實勞賃は勞働者が彼れの勞働に對する報酬として受くる諸貨物——食物や衣服であらうと、又貨幣であらうとそれを問はない——の中に織り込まれたる勞働の分量によつて決定せられるのである。さて眞實勞賃といふ言葉にかくの如き意味を附することは、全く異常であり、且つ如何なる科學に於ても術語の適用に關して參考さるべき最も明白なる規則の總てに明白に矛盾する、[8]』

と言ひ、それ以下數頁を費してリカアド流の眞實勞賃又は名目勞賃の定義が如何に異例に屬し又如何に無益であるかを（四項に分つて）說明して居ることによつて、明瞭である。而して彼がこのやうな批評を揭ぐるに至つたその動機の主なるものは、察するに、彼等の間の私信による論爭であつたのであらう。前揭のリカアドよりマルサスへの書簡が、明かにその間の消息を物語つてゐる。

8) Malthus, Definitions in political Economy. 1827. p. 28.

ベイリイのリカアド批判については、後に之を述べる機會がある。

次にマルクスは、その遺著『剩餘價値學說史』第二卷上篇（一二〇頁、杉田氏譯『リカアド批判』一八九頁）に於て、右の點に言及して居るのであるが、それはリカアドが勞働の價値と勞働力の價値とを區別せざりしことに對する批判の途中に於てなされたものである。

三、斯くて、要するに、リカアドは勞働といふ商品に就ても亦、他の諸商品と同樣に、其の價値はその生產に要したる勞働の分量によつて決定さる、との勞働價値論を維持せしものなること、及びこの勞働の價値が、上衣、穀物、貨幣など勞働者によつて實際に取得さるゝものゝ數量として現はるゝとき、之を概括して名目勞賃又は勞働の名目價値と名づけしことを、吾々は知り得たのである。而して彼は、上衣、穀物など勞働者が直接に消費する諸貨物の數量によつて示されたる勞賃——上述の如くマルサスを始めとし殆ど總ての學者は、之をこそ勞働の眞實勞賃と呼んで居るのであるが——に對しては何等特別の名稱を與へず、た 貨幣の數量によつて示されたる勞賃に對して貨幣勞賃なる名稱を與へた。故に上に述べたる勞働の自然價格及び市場價格の區別は、實にこの貨幣勞賃の分類に外ならないのである。

今勞賃の種類に就てのリカアドの學說を表示すれば、次の如くなるであらう。

- 勞賃
  - 眞實勞賃 (real wages)（勞働の價値）
  - 名目勞賃 (nominal wages)
    - 貨幣勞賃 (money wages)（勞働の價格）
      - 〔實質勞賃〕（勞働者が貨幣勞賃によつて購入する諸貨物の分量によつて示されたる勞賃）
    - 自然勞賃 (natural wages)（又は勞働の自然價格 (natural price of labour)）
    - 市場勞賃 (market wages)（又は勞働の市場價格 (market price of labour)）

○注意　角括弧内の文字は私が假りに附けた名稱である。

惟ふに資本主義社會に在つては、勞働者は貨幣勞賃を以て酬ひられ、彼等が直接に消費する諸貨物を以て酬ひられざるを常とするから、從つて彼等の生活内容が豊かであるか乏しいかは、彼等の受くる貨幣勞賃の高とそれを以て購入する諸々の消費貨物の價格との關係に依存するのである。故に貨幣勞賃が如何に騰貴しても、實質勞賃が常に必らずそれに追從するとは限らない。しかし又之と同時に、眞實勞賃は勞働者の受くる貨幣又は諸消費貨物そのものゝ分量ではなくて、その生産に必要なる勞働量なのであるから、從つて勞働者が如何に多くの貨幣勞賃又は實質勞賃（共に名目勞賃）を得るとするも、若しそが貨幣なり諸消費貨物なりの生産がより容易になつた結果であるとするならば、勞働の眞實價値若くは眞實勞賃は必らずしもそれと同時に騰貴すると言

ひ得ないばかりでなく、却つてそは下落することすらある。リカアドはこの理を說明するために、次のやうな例を擧げてゐる。

卽ち、或る特定の時に於て生產されたる百個の帽子、百著の上衣、及び百クウォタアの穀物が、それぞれ

勞働者に……二五

地主に……二五

資本家に……五〇

の割合で分配されたとする。然るにその後各生產部面に於ける生產力が增大したゝめ、同一量の勞働を以て、二百個の帽子、二百著の上衣、及び二百クウォタアの穀物が生產さるゝやうになつたが、それと同時にその分配割合が變つて、各々百につき、

勞働者は……二二

地主は……二二

資本家は……五六

を取得するやうになつたとする。然るときは、勞働者が受くる實質勞賃は二五から四四に增加したにも拘らず、それはたゞ彼がより廉價なる貨物をより多く取得するに至りしことを意味する

にすぎないのであつて、彼れの眞實勞賃卽ち勞働の價値は二五より二二に下落したのである。[9]

この例によつても明らかなやうに、眞實勞賃若くは勞働の價値なるものは、飽くまで、勞働者が受領する貨幣若くはこの貨幣をを以て購入する諸貨物を生産するに必要なる勞働の分量によつて測定さるべきであるといふのが、リカアドの眞意である。而かも勞働者が受くるこの眞實勞賃は彼が貨物に與へる所の價値よりも常に小でなければならないから、從つて貨物の價値より勞働の價値を差引けるものが卽ちマルクスの所謂剩餘價値であつて、これが地代又は利潤といふ形で地主や資本家に分配されるのである。故にリカアドにとつてみれば、勞賃、利潤、地代の分配問題は、或る貨物の價値が勞働者と資本家と地主との間に如何なる割合で分け得られるか、換言すれば、勞賃、利潤、及び地代が諸貨物の一定の價値の中それぞれ幾千の率を占むるか、といふ基本形態に於て、先づ理解されなければならないのである。彼が『吾々が、正しく、利潤、地代、及び勞賃の率に就て判斷することが出來るのは、各階級によつて取得さる〻生産物の絶對的分量によるのではなくて、その生産物を取得するに入用ごさる〻勞働の分量によるのである。』[10]と言へるは、正しくこのことを裏書するものである。

四、以上により、私は、リカアドが單に勞働の價格のみを取扱つたのではなくて、確かに商品としての勞働の價値について他の諸商品の價値に對すると同樣の理論を適用したることを、ほゞ

9) リカアド『經濟原論』80-85頁參照
10) 同上 80頁

明かになし得たと思ふ。而して若し彼がかゝる態度を徹底的に維持することが出來たならば、彼れの勞働價値論はより確乎的なる剩餘價値論にまで進展し得た筈であるが、しかも彼は上述の如く勞働の價値に關する基本的議論をたゞ處々に暗示的に叙述したるに止まり、之を彼れの全體系のうちに完全に取り入れることが出來なかつた。然らば彼をしてかゝる不徹底なる態度を取らざるを得ざらしめたその原因は何處に在るかといふに、それは彼が商品として市場で賣買さるゝものは勞働ではなくて實は勞働力であることに思ひ及ばざりしことに在るのである。勞働力の價値を論ぜずして勞働の價値を論ずることより生ずる、勞働價値論上の矛盾について、爰に詳細なる説明を加へて居る暇はない。吾々は、リカアドに加へたるベイリイの批判を引用することを以て滿足しよう。ベイリイ曰く、

『リカアド氏は、價値は生産に使用された勞働の分量に依存する、といふ彼れの學説を一見妨ぐる惧れある一難點をば、十分巧妙に回避して居る。若しこの原則が嚴格に固執されるならば、勞働の價値はその生産に使用されたる勞働の分量に依存する、といふ結果になるが、それは明かに不合理である。そこでリカアド氏は、巧みに方向轉換を行つて、勞働の價値を勞賃を生産するに必要とさるゝ勞働の分量に依存せしめて居る。或は彼自身の言葉を用ふるの便宜を與へるならば、彼は、勞働の價値は勞賃を生産するに必要とさるゝ勞働の分量——そは彼によ

れば、勞働者に與へらるゝ貨幣若くは諸貨物を生産するに必要とさるゝ勞働の分量、を意味する――によつて測定さるべきである、と主張する。この主張は、布の價値は其の生産に與へられたる勞働の分量によつてゞはなくて、布と交換さるゝ銀の生産に與へられたる勞働の分量によつて測定さるべきである、といふに等しい。[11]』

若しリカアドが、價値の實體をなす所の勞働とそれ自身價値を有つ所の勞働力とを嚴格に區別してゐたならば、かくの如き非難は起り得なかつたであらう。

第二節　勞働の自然價格と市場價格との意義

一、前節に於て、私は、勞賃の本體卽ち商品としての勞働の價値に關する說明を、リカアドが決して看過してゐなかつたことを證明し得たと信ずる。而かも彼がその勞賃論に於て主として說きたる所は、勞働の價値に關するものではなくて、その外面的形態たる勞働の價格に關するものであつた。是に於て、彼れの勞賃論は彼れの勞働價値論と極めて稀薄なる連絡をしか保たないことに成り終つた。併し乍ら若し吾々が、勞賃の本質をではなくて、勞賃の大さのみを論ずる積りならば、貨幣それ自身の內在的價値の不變を假定する限り、(而してリカアドは常にこの假定の下に推論をして居る。) 勞働の價値といふも勞働の價格といふも、そは結局同じことになるのであ

11) Bailey, Critical Dissertation. 1825. pp. 50-51.

る。何故なれば、名目勞賃は勞働の價値（眞實勞賃）を勞働者が實際に受取る諸物によつて表示したるものであり、而して勞働の價格（貨幣勞賃）はこの名目勞賃の一種に外ならないから。仍で勞賃論の主題が勞働の價値から勞働の價格へと移り行くのである。勞働の自然價格及び市場價格に關するリカアドの所說を觀察すべき時が、かくて漸く到來した。私は本稿に於ては此等兩者の各〻の意義を闡明するに止め、その間の關係についての議論は稿を改めて之を說明するであらう。以下二乃至四はリカアドの自然勞賃論を、又四乃至六は彼れの市場勞賃論を取扱ふ筈である。

二、リカアドによれば、『勞働の自然價格とは、勞働者をして、相互に、增加又は減少なしに、生存をし且つ其の種族を永續するを得せしむるに必要なる、その價格のことである。』[12] この定義に就て注意すべき事柄が二つある。その一は『增加又は減少なしに』といふ句であり、その二は『……必要なる……』といふ句である。

先づ第一の點に就て觀んに、リカアドが『增加又は減少なしに』といへるは、勞働者の數が或る恒常數を保つやうにといふ意味であるか、或は或る瞬間に於ける勞働者數を維持するやうにといふ意味であるか、若くは勞働に對する需要に丁度適合せしむべくその供給を保たしむるやうにといふ意味であるか、に就て、從來學說が岐れて居る。例へばシュライは、勞働の自然價格は

12) 前揭

『勞働者を支持し且つ彼をして市場に於て勞働の不減の供給を保つために必要なる家族數を養ふことを得せしむる』ものでなくてはならない、とのトランズの說[13]と、リカアドの右の說とを對照して、

『トランズにとつては、自然勞賃は勞働の供給の減少を惹起さないだけの數に人口を維持するに十分なものであるが、リカアドにとつては、そは勞働者人口をその瞬間の數に維持する所のものである、』[14]

と言つて居る。その意味は、トランズの場合には勞働の自然價格は勞働に對する需要にその供給を適應せしむるに必要なる價格であることを要するが、リカアドの場合にはそは各瞬間に於ける眼前の勞働者人口を維持するに必要なる價格を指すのである、といふことになる。

又例へばキャナンは、トランズの學說に對してはシュライと同じ解釋を採つてゐるが、リカアドのそれに對しては、彼れの所謂勞働の自然價格は、

『勞働者人口を停止狀態に置くであらうところの、丁度それだけの勞賃』[15]

である、といつて、そが勞働者の數を或る恒常數に保つに必要なる價格を意味するものなることを、主張して居る。

又例へばマルクスは、『剩餘價値學說史』に於てリカアドの右の句を引用したる後に、『增加又は

13) Torrens, R., External Corn Trade. 1815. p. 62.
14) Schrey, M., Kritische Dogmengeschichte des Ehernen Lohngesetzes. 1913. S. 31.
15) Cannan, E., Theories of Production and Distribution. p. 247.

減少なしに』といふ所へ註を附して、

『生産の平均的進歩が要求する底の增加率で、と言ふべきであらう。』[16]

と言つて居る。勿論こゝに『……と言ふべきであらう』とあるは、マルクスがリカアドの所說を自己の勞賃論の立場から訂正したものではなくて、リカアドの意味したであらう所のものを忖度して、かくの如く書き改めた方が良からうと、一寸注意したまでゞある。

かくの如く、『增加又は減少なしに』といへる句に對して、吾々は三通りの解釋を有つて居るのであるが、斯んなことは問題として如何にも些々たるものであるかの如く見えるけれども、併しそは實にリカアドの勞賃論の全體を理解する上に至大の影響を有つてゐる。何故なれば、右の解釋の中何れを採るかによつて、彼れの自然勞賃なるものが靜態的觀念であるか若くは動態的觀念であるかといふことに就ての判定が分れ得るからである。

惟ふに、或る恒常數の勞働者人口を支持するに必要なる勞働の價格をその自然價格（卽ち自然勞賃）だと解するならば、そは明かに靜態的觀念である。又『生産の平均的進歩が要求する底の增加率で』勞働者人口を支持するに必要なる勞働の價格をその自然價格だと解するならば、そは明かに動態的觀念である。而して又或る瞬間に於ける勞働者人口を支持するに必要なる勞働の價格をその自然價格だと解すゝならば、そは動態的觀念だと言ふことも出來るし又意味の採りやう

16) Marx, Theorien. II. 1. S. 118. 杉田氏譯（前提書 186頁）に依る。

によつては靜態的觀念だと言ふことも出來るであらう。何故なれば、或る瞬間に於ける勞働者人口といへるを、勞働に對する需要に應じて各瞬間毎に增減するそれであると解するならば、それを支持するに必要なる勞賃は動態的にしか考へられないし、又それは眼前の勞働者人口を意味するがしかしその恒常不變を假定しての上であると解するならば、勞賃は靜態的にしか考へられないからである。しかし何れにしろ、この第三の解釋は他の二つの解釋の何れかに歸着して仕舞うのである。

斯くて吾々は、リカアドの自然勞賃は靜態的觀念であるか又動態的觀念であるかといふことに就て、最後の斷定を下さなければならないのであるが、私は、リカアドの所謂勞働の自然價格を靜態的觀念であると解釋することによつてのみ、之を動態的觀念たる勞働の市場價格に矛盾なく對立せしめ得るのであり、又リカアド自身も、かのトランズの勞賃論に負ふ所頗る大であるにも拘らず、トランズが『勞働の不減の供給』と言へるを訂正して『增加又は減少なしに』となせるは、全く右の點を考慮したる結果である、と解するが故に、彼れの自然勞賃は勞働者人口の或る恒常數を維持するに必要なる（言ひ換へれば、勞働者人口を停止狀態に置くに必要なる）價格を意味する、とのキャナンの說に加擔せざるを得ない。

三、次にリカアドが、『勞働者をして……生存をし且つその種族を永續するを得せしむるに必

要なる、その價格』と言へる場合、『必要なる』とは一體如何なる實質的內容を指してゐるのであるか。

この點に關しては、從來大した異見はないやうである。卽ち、リカアドは、この言葉を、勞働者及びその家族の生理學的、自然法則的生存、從つて絕對的に恒常不變なる最小限度の生存を保證するに必要なる、といふ意味に用ひたのではなくて、時と處とに應じて異る所の勞働者の生活最小程度を維持するに必要なる、といふ意味に用ひたのであるといふことに、諸家の意見が大體一致して居る。それは、次の如きリカアドの明白なる言葉があるからである。

『勞働の自然價格は、勞働者及び彼れの家族を支ふる爲めに要求さるゝ食物、必要品、及び便利品の價格如何に依る。』[17]

『勞働の自然價格は、假ひ食物及び必要品のみを以て測定さるゝものだとしても、それは絕對的に固定し且つ恒常である、と考へてはならない。それは、同一國に於ても、異れる時に於て變動し、而して異れる國に於ては著しく相違する。それは、本質的に國民の性癖及び慣習の如何に懸つてゐる。』[18]

『慣習が（勞働者の）絕對必要品となす所の慰樂品。』[19]

卽ちリカアドの謂ふ、勞働者及びその家族を支ふるに必要なるものは、單なる動物的生存を保つ

17) リカアド『經濟原論』137-138頁
18) 同上 144頁　多少改譯したる部分あり。
19) 同上 140頁　括弧內の文字は譯者挿入。

に必要なるものばかりではなく、『慣習が絶對品となす所の慰樂品』若くは『便利品』をも含んで居るのであり、且つ各國民の文化段階に應じてそれぞれ相異るを妨げない、といふことが明白である。而かもそは、一定の國一定の時に於ける最低程度の生活を保證するものたるに過ぎないのである。蓋し、彼によれば、勞賃は『そが正常勞賃である限り、常に必要的生產費（勞働力を再生產するに必要なる費用の意――譯者註）たるにすぎず』、そは到底『租稅若くは貯蓄のための控除』に耐へ得ないからである。[20] これディールがリカアドの自然勞賃を解して、『自然勞賃は、或る自然科學的に決定され得べき大さを示すものではなくて、一つの社會的意義を有つ。リカアドは、それによつて、慣習と成れる生存最小限度（ein zur Gewohnheit gewordenes Existenzminimum）を言ひ表はして居る、』[21] と言へる所以である。

之を要するに、リカアドが勞働の自然價格若くは自然勞賃の定義に於て、勞働者人口の或る恒常數を維持するに必要なる生活必要品と言へるものは、決して絶對的生活必要品を指すのではなくて、相對的生活必要品を指すのである。

併し乍ら、これまで多く看過され來つたことであつて、而かも吾々の注意しなければならないのは、リカアドは、右述の如く、食物や必要品の外に便利品若くは慰樂品をも自然勞賃構成の要素に加へたけれど、而かも自然勞賃の騰落を論ずるに際しては、必らずしも常に食物、必要品、

20) Cf. Ricardo, Principles. Gonner's ed. p. 336.
21) Diehl, K., Erläuterungen. II. S. 4.

及び便利品を同列に置いてその各〻の價格變動を自然勞賃に對して同等の影響を有つものと看做さうとはしてゐない、といふことである。但しこの點に就て詳しき説明を加へることは、之を別の機會に殘し、此處では、唯だ、自然勞賃の大さを左右するものとして、リカアドは主として食物の價格のみを數へ他の必要品及び便利品の價格は殆ど之を無視して居る、といふことを豫示し置くに止める。

四、これより以下は、勞働の市場價格に關するリカアドの所説の解釋である。

『勞働の市場價格とは、供給の需要に對する比例の自然的作用によつて、それに對して事實上支拂はるゝ所の、その價格をいふ。勞働はそが稀少なる時に高く、而してそが豐富なる時に安い。[22]』

これはリカアドが勞働の市場價格といふ概念に與へた定義である。この定義に就て注意すべきは、第一に勞働の市場價格は實際勞働者に支拂はるゝ價格であるといふこと、及び第二にそは勞働の供給と需要との關係によつて定まるといふことである。私は先づ此等の二點につきリカアドの學説を更らに立ち入つて解説し、然る後に第二點に關連して勞賃基金説とリカアドの市場勞賃論との關係に及ぶことゝする。

先づ第一の點に就て述べんに、前述の如くリカアドの所謂勞働の自然價格なるものは、靜態的

22) リカアド『經濟原論』139頁

觀念であり從つて亦抽象的觀念である。之に反して、勞働の市場價格なるものは、彼によれば、勞働といふ商品が市場に於て現實に賣買せらるゝその時毎に、それに對して附せられる價格をいふのであるから、そは動態的觀念であり從つて亦具體的觀念である。而かも、丁度他の諸商品の現實の市場價格が結局に於て所要勞働量によつて決定さるゝその價値に支配さるゝやうに、この勞働の市場價格は勞働の自然價格によつて根本的に左右されるのである。但し、一部の學者のやうに、リカアドの所謂勞働の自然價格はその所謂勞働の市場價格が平均せられたるものに過ぎない、と考ふるは、大なる誤解である。されど私は、茲では此等兩者の關係を論じて居るのではないから、たゞこのことを暗示して置けば足る。

五、さて次に、リカアドは、この勞働の現實的價格は勞働の供給と需要との關係によつて定まると言つて居るが、吾々は何によつて勞働に對する需要と其の供給との大さを知り得るのであるか。曰く、勞働の供給の大さを示すものは人口であり、勞働に對する需要の大さを示すものは資本である。而して『資本、卽ち勞働を雇傭する手段、の蓄積は、社會の各異れる時代に於て、その速度に大小がある。そは、總ての場合に於て、勞働の生産力の如何に依存しなければならぬ』し、又『人口は、好都合の事情の下に於ては、二十五年で二倍すると計算されて居る。[23]』

勞働の供給及び需要に關するリカアドの說明を極く大ざつぱに觀れば以上の如くであるが、併

23) 同上 146-147頁參照

し吾々は、勞働の供給を意味する所の人口の問題は姑らく措き、勞働に對する需要を意味する所の資本に就て、彼れのより詳細なる說明を觀る必要がある。周知の如く、彼は資本を固定資本と流動資本とに分つたが、こゝに勞働に對する需要を示す所の資本とは、彼によれば、固定資本と流動資本とを共に含む所の一般的資本を指すのであるか、若くは『食物及び衣服に支出さるゝ所の勞賃の支拂に主として向けらるゝ流動資本』[24]のみを指すのであるか、が問題である。而して私は、リカアドの用語法の甚だ曖昧なることを認めはするが、併し彼は固定資本と流動資本とを含む所の一般的意味に於ける資本を以て勞働に對する需要の大小を示す所の資本だと主張して居る、と解釋する。

リカアドは、數個所に於て、[25]流動資本をタウシグの所謂勞賃資本(wages-capital)若くはマルクスの所謂可變資本の意味にとつて居る。併し乍らそは、(一)それから勞賃が支拂はれるのは流動資本であつて固定資本ではない、且つ(二)流動資本の主たる否唯一の要素は勞賃である、といふことを示したるに止まり、決して勞働に對する需要の增減を左右する原因が流動資本の大小である、といふことを示したのではない。惟ふに、勞働に對する需要の增減は結局流動資本の增減といふ形をとつて現はれるけれど、併しその形をとつて現はれるといふことゝ、それが原因であるといふことゝは、非常に意味が違う。而してリカアドは、實に次の諸例によつても分るやうに、勞働

24) 同上 46頁參照
25) 例へば、Works, p. 21. and pp. 371-372 參照

に對する需要を左右する原因としては一般的資本の增減を意味してゐたのである。

例へば、『勞賃に就て』の章に於て、彼は、『增加されたる資本が勞働に對する新らしい需要に向つて與へる所の刺戟』[26]に就て述べたる直ぐ後に、資本を定義して、『そは、一國の富の中生產に使用さるゝ所のその部分である。而してそは、食物、衣服、道具、粗生原料品、機械など、勞働を實行せしむるに必要なるものより成る』[27]といひ、又その次の頁に於ては、漠然と『資本の增加に比例して勞働に對する需要に增加があるであらう』[28]ことを述べて居る。

又例へば『穀物の低き價格』の中に於て、彼は、『經驗の示す所によれば、資本と人口とは代る代る指導的地位に立ち、勞賃はその作用を受けて豐富となり又貧弱となる』[29]とか、『進步しつゝある狀態に於ては、勞賃の上下は資本がより速かに增大するか人口がより速かに增加するかによつて定まる』[30]とかいふ句を頻出して居る。

又例へば彼は『マルサスへの手紙』の中に於ても、『增加されたる資本が雇傭し得る程度にまで人口が增加しない間は、勞賃が騰貴し而して全生產物のより大なる部分を吸收するであらう。……機械に大改良が加へられた場合には、一部の資本が他の事業に向けらるべく解放さるゝであらうが、しかし同時にそれ等の事業に必要なる勞働も亦解放さるゝであらうから、附加的勞働に對する需要は、改良の結果たる生產の增加が資本の新らしき蓄積を促さゞる限り、決して起り得

26) リカアド『經濟原論』140頁
27) 同上 141頁
28) 同上 142頁
29) Ricardo, Works. p. 379.
30) *Ibid.*

ないであらう。かくて勞賃に及ぼす諸結果の原因は資本の蓄積てふ一事に在る。……』[31]と言つて居る。

以上の諸引用句に現はれたる資本なる言葉は漠然と一般的資本を指して居るのであるが、なほリカアドは、『機械に就て』の章に於て、『勞働に對する需要は流動資本の增加に依存するのであつて固定資本のそれには依存しない。云々』とのバアトン (John Barton) の句を引用して、これに、『如何なる事情の下に於ても、(一般的意味に於ける) 資本の增加は勞働に對する需要の增加を伴ふべきではない、といふことを理解するのは容易でない、と私は考へる。精々言ひ得ることは、その需要は遞減的比例にあるであらう、といふこと位である。』[32]との駁論を加へ、以て勞働に對する需要の大小を左右する原因は流動資本の多少にのみ在らざることを、積極的に明かになして居るのである。

六、以上述ぶる所により、リカアドが勞働の市場價格又は市場勞賃は勞働の需要供給の關係によつて定まると言へる場合の需要の大さを決定するものは、流動資本のみではなくて、一般に資本全體の大さであることが、明かになつたと思ふが、なほこれに關連して、吾々は、リカアドが處々に『勞働の維持のための基金』といふ言葉を用ひて居ることに注意を向ける必要がある。

この言葉は『勞賃に對する租稅』及び『粗生々產物に對する租稅』の二つの章の中に最も多く見出される。今その一二例を擧げんに、『勞賃に對する租稅』の中に於て、彼曰く、

31) Letters to Malthus. pp. 97–99.

32) リカアド『經濟原論』362–363頁 脚註 多少改譯したる部分あり。括弧内の句は譯者の挿入したるもの。

『勞賃が課稅せられたる時に勞働が騰貴しないとするならば、勞働に對する競爭（需要といつても可ならんか――譯者註）が大いに增加するであらう。何故なれば、かゝる租稅を支拂ふを要せざる資本所有者は、勞働の雇傭に對して以前と同一の基金を有するが、他方この租稅を受領したる政府は、この同じ目的の爲めの附加的基金を得るであらうから。かくて政府と資本家とが競爭相手となり、彼等の競爭の結果は勞働の價格に於ける騰貴となるから。……（然るにこの際）若し租稅が直接資本家に課せられて居たとするならば、勞働の維持に對する彼等の基金は、同一の目的に對する政府の基金が增加せしめられたと丁度同じ程度に、減少せしめられたであらう。而してそれ故に、勞賃に於ける騰貴は全く無かつたであらう。何故なれば（勞働に對する）需要は（前の場合と）同一であつても（前の場合と）同じやうな競爭がなかつたであらうから。……（又）假りに勞賃に課せられたる租稅の額が、勞働者から徵收された後に、無代で彼等の備主達に支拂はれるとするならば、そは勞働の維持に對する備主達の貨幣基金を增加するであらう、併しそは諸貨物又は勞働の何れをも增加しないであらう。……（以上は租稅が資本として再び用ひらるゝ場合の結果を考へたのであるが、）併し租稅の徵收額は一般に浪費せられ居るものなることを忘れてはならない。……故に租稅は、資本を減少することによつて、勞働の維持に向けられたる基金を減少し、その故に勞働に對する眞實の需要を減少するの傾向をもつて居る。……』[33]

33) Works. pp. 132–133. 括弧内の句は譯者の挿入したるもの。

又『粗生々産物に對する租稅』の中で曰く、

『人口に對する刺戟が與へられたときには、實際正に然かあるべき程度以上の結果が齎らさるゝを常とする。卽ち人口が過大に增加せしめられるため、勞働に對する需要の增加あるにも拘らず、資本の增加以前に比べて、人口は勞働者を維持する爲めの基金に對しより大なる割合を保つ、といふ結果が起りそうであると共に、亦實際一般に起るのである。』[34]

此等の引用句より察するときは、リカアドの所謂『勞働（者）を維持するための基金』なるものは、(一)一般的意味に於ける資本の異名ではないが、而かもこの基金の大小卽ち勞働に對する需要力は、資本の大小に正に比例するといふこと、及び(二)しかしそれかといつてそは流動資本そのものを指すのでもないといふことが、略言すればそは一般的資本又は流動資本の孰れとも同じからざる一種曖昧なる概念であるといふことが、分るであらう。

而してこの『勞働を維持するための基金』なる言葉は、アダム・スミスが既に『國富論』の中で之を使用し、又その後に所謂『勞賃基金說』なるものを生み出す機緣となつたものであるが、併しスミスやリカアドがこの文句を使つたからと云つて、彼等を『勞賃基金說』の信奉者であると言ふは、明かに當つてゐない。何故なれば、嚴格なる意味に於ける『勞賃基金說』は、勞働の供給を示すものとして勞働者の人口を擧げ、又勞働に對する需要を示すものとして流動資本の中勞働者の支拂に充てらるゝ部分を擧げ、然る後に一定の時に於ては此等兩者の數は一定して居るか

(34) *Ibid.* p. 96.

ら、從つて各勞働者の受くる平均勞賃は豫め定まれる額以上には出ない、と說くのであるが、例へばリカアドに就て見るに、彼は前述の如く、勞働に對する需要を決定する資本を決して流動資本に限らなかつたし、又『勞働を維持するための基金』といへるときも之を極めて曖昧に用ひはしたけれど併し少くとも之を流動資本の意味には取つてゐないからである。

尤も『粗生々產物に對する租稅』の章の中に、

『鑛山よりの貴金屬の流入又は銀行業の特權の濫用の結果たる、貨幣價値の下落は、食物の價格を騰貴せしめる他の原因である。しかしそは生產さるゝ分量には何等の變動をも齎らさないであらう。亦そは勞働者の數並びに彼等に對する需要を紊すこともないであらう。何故なれば、それによつて資本の增加も減少も起らないであらうから。勞働者に分與さるべき必要品の分量は、必要品の比較的需要と供給に對する、勞働の比較的需要と供給の關係に依存するのである。貨幣は分量を言ひ表はすための媒介物に過ぎない、而して必要品と勞働とは何れも變動しないのであるから、勞働者への眞實の報酬は變化しないであらう。貨幣勞賃は騰貴するであらうが、しかしそは勞働者をして以前と同一分量の必要品を享くるを得せしむるにすぎないであらう。』[35]

といふ句がある。而してこは、タウシグをして『古典派經濟學者の著書の中に於て、その總てが勞働者に歸屬しなければならない所の、一つの豫定せされたる基金についての、この(リカアドの)

35) *Ibid.* p. 96. 圏點新附

記述よりもより直接法なる記述を見出すことは、困難であらう、[36]』と言はしめた所のものである。

成るほど、リカアドは、この句の中に於て、一定の期間には必要品又は食物の一定量が存在し、且つ勞働者人口の一定數が存在するから、貨幣價値に如何なる變動があらうとも、一勞働者に分與さるゝ食物又は必要品の分量は不變である、と說いて居るのであつて、そは一見『勞賃基金說』を述べたるものゝ如く考へられる。併し乍ら、リカアドが茲にいふ食物又は必要品なるものは、流動資本の一部としてのそれのみを意味するのではなくて、一般に或る國に存在する必要品又は食物を指して居るのである。故にそは決して『その總てが勞働者に歸屬しなければならない所の、一つの豫定せられたる基金』を意味するのではない。卽ち、リカアドが『勞働者に分與さるべき必要品の分量』と言へるものは、分與さるゝことを要する必要品の分量の意ではなくて、貨幣的市場勞賃が支拂はれたる後にそれを以て購買さるべき必要品の分量の意である。蓋し、若しこれを勞働者に分與さるゝことを要する必要品の分量だと解するならば、そは『必要品の比較的需要と供給に對する、勞働の比較的需要と供給の關係に依存する、』といへる次の句は無用のものとなつて仕舞うであらうから。

かくてリカアドは、何處に於ても『勞賃基金說』を說いてゐないばかりでなく、前述の如く、勞働に對する需要の大さを決定するものは流動資本の一部のみにあらざることを明かに主張して、斯說を否定して居るのである。

36) Taussig, Wages and Capital. 1915. p. 178.